平和共存願う声が希望に

～ガザでの戦闘、早期終結祈る～

ほの暗い部屋の壁に映し出された一葉の写真。その中で微笑んでいるのは、ぬいぐるみを抱いたまだあどけない少女。映像にかぶせるように、淡々とナレーションが流れます。「少女はこのぬいぐるみが大のお気に入りでいつも一緒だった。彼女が収容所のガス室に送られた時も」。

25 年前に訪れたイスラエルのホロコースト記念館でのこの情景は、脳裏に焼き付いて離れません。ヘブライ語で「記憶と名前」を意味する「ヤド・バシェム」と名付けられたこの施設には、ナチスによる大量虐殺（ホロコースト）の犠牲となった600万人とも言われるユダヤ人たちに関する膨大な資料が蓄積され展示されています。そこには、犠牲者一人ひとりの名前が読み上げ続けられている部屋もありました。この場所を訪れ、20世紀最悪とも言える悲劇の実相に触れた者は、皆一様に声を失います。

そもそもパレスチナ問題の始まりは、紀元1世紀頃にさかのぼります。ローマ帝国に故国を追われ離散（ディアスポラ）したユダヤ人が、迫害に耐えつつ欧州各国などにコミュニティを作り、国際政治に翻弄されながらもホロコーストを生き延び、1948年にやっとのことで建国したのが「イスラエル」でした。

しかし、それまで2千年にわたり同地に住んでいたアラブ人（パレスチナ人）が住む場所を追われ、これに怒った周辺アラブ諸国は建国翌日にイスラエルに攻め込みました（第1次中東戦争）。度重なる戦争の末、93 年にイスラエルとパレスチナ解放機構（PLO）との間で「オスロ合意」が結ばれ、設立を認められたパレスチナ自治政府にヨルダン川西岸とガザが引き渡されたのです。

この歴史的合意によりパレスチナ問題の平和的解決への期待が高まりました。しかし、合意に署名しノーベル平和賞を受賞したラビン・イスラエル首相が、95 年に和平に反対するユダヤ人青年に暗殺され、事態は暗転します。和平反対派が力を増すイスラエルに対抗して、ハマスなどのイスラム過激派によるテロが激化。これにまたイスラエルが武力で対抗するという悪循環に陥ったのです。

留学先の英国防大学のプログラムにより私が中東を訪れたのは、この時期（98 年）でした。

その際、ガザ地区も視察しましたが、イスラエル統治地域との格差のあまりの大きさに愕然としました。生活インフラの貧弱さは目を覆うばかりで、下水の悪臭が漂う狭いエリアに多くの住民がひしめき合って暮らしていたのです。

後年、イスラエルの封鎖によって「天井のない監獄」と表現されるようになったガザですが、当時からその兆候は明らかでした。多くの者が職を求めて地区の外へ働きに出るものの、テロ事件のたびにイスラエルが「安全上の理由」でガザ地区からの出入りを閉ざすため収入が断たれるのです。こうして蓄積していった住民の強い不満が、過激派のハマスへの支持につながったと言えます。

この問題が「世界で最も解決が難しい紛争」と言われるのは、双方に歴史的動機があるからです。

パレスチナ人の側には、フセイン・マクマホン協定などにより大国にだまされて土地を奪われた恨みと、長期にわたりガザの悲惨な人道状況が放置されてきたことへの根深い怒りがあります。

他方のイスラエル側にあるのは、ディアスポラからホロコーストに至る迫害の記憶、油断すれば再び国を失いかねないとの恐怖、そして建国以来最悪の犠牲者を出した 10 月のテロへの怒りです。

この気が遠くなるほど長い暴力の連鎖を前にすると、ただただ無力感に苛まれ、なす術を知りません。しかし、怒りにまかせて下す決断は必ず誤ります。民間人へのテロは決して許されませんが、だからと言ってテロリストを滅ぼすために多くの無関係な人々を犠牲にすることは絶対に正当化できません。今回の衝突で仮にハマスが殲滅されたとしても、新たな憎しみがまた別のテロ組織を生み出すことは明らかです。

人質解放交渉が続いていると報じられる一方、戦闘は継続しており、状況は予断を許しません。わずかな救いは、イスラエルとパレスチナ双方の人々の間に平和共存を

願う声があることです。こうした声に導かれて両当事者が冷静さを取り戻し、衝突が一刻も早く終わることを祈るばかりです。

（山形新聞 2023 年 12 月 7 日付「直言」欄からの転載）